多様な形態の教育機関で一人ひとりの“進化する力”を引き出す

昨年度、埼玉県志木市に設立された技能連携校「むさしの高等学院」（埼玉県志木市）の望月泰宏学長は、40数年にわたって学習塾、フリースクールなどにより一人ひとりに適した学びの場を作ってきた。発達障がい傾向・引きこもり傾向の小・中・高生の学習支援も行っている。そして今、これまでに設立してきた、また連携してきた組織を有機的につなげた“共同体”作りへの転換も図っている。時代のニーズに対応した学びの場作りの変遷を聞いてみた。

むさしの高等学院
学長　望月　泰宏 さん

定時制高校で知ったマニュアルでない教育

大学生時代の教育実習の際に私はあえて定時制高校を選びました。当時の定時制は今の定時制と異なって、行く所がないから定時制に行くのではなく、経済的理由により昼間働いている人が行くための高校でした。定時制高校で教育実習を受けたことで、それまで私のなかにあった「学校」という概念が変わったように思います。

例えば、生徒のなかには教育実習生の私よりはるかに年上の40代の人もいました。その生徒が「先生！男と女の愛とは何ですか」と若い私をからかうのです。教室中が爆笑です。

ある時は、授業をしていると生徒がグーグー寝ているのです。その態度に怒ったというのではなく、あからさまに寝ているので単に起こそうと思って近寄ったところ、周りの生徒が「疲れているんだから、起こしちゃダメだよ」と言うわけです。私も、そうなのかと思ったのですが、その話を担任の指導者に話したところ「校門をくぐるだけでもう十分なんだよ。それだって一生懸命に来ている。仕事の関係で来られない生徒がいくらでもいるのだから」と言われました。

授業の終業ベルが鳴って給食の時間になればパッと起きてご飯を食べに行く。でも授業中はガーッと寝ているのです。それが私にとって原点になっています。学校というのは、マニュアルや規則があって運営されています。でも、そうではない面があることを定時制高校で知りました。そのとき、そのマニュアルでない部分に感動している自分がいました。私は定時制高校の生徒たちにたくさんのことを学びました。それは、今の私につながっているところです。

「人と人の信頼関係」からできた塾からの発展

大学は卒業したのですが、教師にはなりませんでした。札幌のある高校から内定を頂いていたのですが。教育実習のとき、板書せずに授業していた私はそこの校長から叱責を受け、喧嘩してしまった経験が尾を引き、自分は学校に合わないと考えたからです。大学は北海道だったのですが結局実家の埼玉県志木市に帰ってきました。しばらくは、家業の手伝いや家庭教師などをしていました。そのうち、父親から学習塾の設立を勧められて、小学生を何人か集めて勉強を教えていたところ、あっという間に塾生が集まりました。本気で増やそうというほどでもなかったのですが、ちょうど塾ブームのはしりだったこともあって、またたく間に塾生が増えていきました。

私が塾を作ると決心したのは、1966年26歳の時です。こう見えて読書家なので、たいへんな蔵書を抱えていました。それを古本屋さんに売って、それも資金の一部にして“掘っ立て小屋”のような教室を作って、「志木学習塾」を始めました。

塾生が増えるのにともなって教室も3つになり、建物は建て替えを繰り返して、2階建てにしたり、建て増したりもしました。当時の塾は、チラシをまいて塾生を集めることもなく、人間関係のなかでしか塾生を集めることはしなかったです。塾生の親御さんからの支持を強く反映し、塾というものが親との人間関係のなかで膨らんでいった時代でした。

塾を始めてから10周年を迎えたときに保護者の支援を受けて「まなびの会」というものを作り、文化活動を始めました。保護者や友人の方々が手作りで開催して頂いた記念式典の席上、約300名近い参加者に「塾でない塾を作る。お金を無視した塾を作る」と宣言しました。そこで、それまでの志木学習塾の方は縮小することにしました。塾生はその当時、三百数十名いました。現在の塾の感覚で言えば数千名の塾と言えるかもしれません。塾長が生徒の名前を覚えられないようではダメだというような思いもあって縮小したのですが、よかったのか悪かったのかと言えば……。今がいいとすればよかったのでしょうが、当時は苦しかったです。そのころ他から塾が進出してきていましたから、縮小となればそちらに塾生も移り、辛い時期になりました。

ただ、もともとが「人と人との信頼関係」からできた塾ですから、いくら他塾のチラシが膨大に配布されようが、合格者の数で勝負してこようが、私の生き方の軸は変わりませんでした。

NPO法人としてのフリースクール

今から20年ぐらい前、1990年前後から学校に行かない子どもたちが目立ってきました。その頃はそのような子どもたちをまだ「怠けのもの」や「病気」と考える社会状況ですから、学校に行かないことを隠ぺいするような傾向が強かったです。しかし、時がたつにつれて、私のところにも不登校の問題で相談に来る親が増えてきました。

当時は、フリースクールという概念も薄かったので、塾として対応したのですが、塾では無理でした。一斉指導を行う塾の枠組みでは無理なので、「個人指導室」というものを塾内に作りました。そこは優秀な子もOK、帰国子女もOK、学校に行かない子もOKということにしました。今の個別指導塾の先駆けのようでもあったのですが、ところが今度は個人指導室の生徒が増えてしまって、不登校の子どもたちの面倒を見るだけのキャパがなくなってしまいました。

その頃、精神科医でクリニックを開業している私の友人にそんな悩みを話したところ、彼の住む静岡県某市にNPOとして、アセスメントなども行いながら不登校生の面倒をみているところがあると紹介されて見学に行きました。そこを訪ねたところ、十数名の子どもたちが皆で歓迎の合唱してくれました。その子たちを見ながら、私は心底泣いたんです。なぜ泣いたかわかりません。ただ自然に涙がこぼれたのです。十数名の子どもたちがきれいな目で一生懸命私の目を見ながら歌ってくれるのです。自然で、ピュアな子どもたちの姿は私の人生で初めての経験でした。学校や学習塾ではあり得ないものに思えました。

それまでの塾の事業形態と異なるNPOを作ると決心をして、2001年に「NPO法人　フリースクール　むさしの学園」を作りました。「塾」と「フリースクール」を同じ屋根の下で行うことに不安がありました。周囲の人たちからも危惧の声が出ました。しかし、蓋を開けてみたら、結局は「案ずるより生むが易い」でした。賢い（？）大人は組織形態を区別しますが、ピュアな子どもたちは組織形態について何も気にしないんですね。自分に合った居場所であればいいのですから。

私自身は、その後、7年あまりにわたってNPOの施策作りに関わりを持つことになりました。02年には、埼玉県の

▲ むさしの高等学院　望月　泰宏 学長

《沿　革》

1966年（昭和41年）4月
・「志木学習塾」を埼玉県志木市に設立
・「志木学習塾」は、「総合塾　まなび」および「大川塾」と連携させた「まなび教育センター」に発展

1999年（平成11年）4月
・「志木教育クリニック」開設

2001年（平成13年）4月
・「NPO法人 フリースクール むさしの学園」設立
・「子育てに悩む親の集い」発足
・「ＮＰＯ法人コ・ラ・ボ」設立
・「心の相談室＜コ・ラ・ボ＞」発足

2008年（平成20年）4月
・「親サロン」開始

2009年（平成20年）4月
・「若者サロン」開始

2010年（平成22年）4月
・「ひと塾」設立
・「親サロン」および「若者サロン」の活動が盛んになったことで、この二つを統合し、もう一歩進めるための「ひと塾」を設立

2011年（平成23年）4月
・技能連携校「むさしの高等学院」設立

NPOの施策をどうするのかという「NPOネットワーク懇話会」や「埼玉NPO協働戦略プロジェクト」などに関わって、埼玉県のNPO施策のほとんどに関わってきました。日本の先駆けともいえる、埼玉県志木市の25人程度学級をはじめとした教育改革や行政パートナーにも市民委員会の会長として関わりを持ちました。

フリースクール、ＮＰＯ活動、市民委員会による行政改革等に関わったのは、私が60歳になってからのことで、まさにそこから私のいくつ目かの青春が始まったように思います。

その後、04年には、埼玉県内の親の会やフリースクールなど約40団体を集めて「子育てに悩む親の集い連絡会」を作り、親のためのガイドブックも2回発行しました。05年には「NPOコ・ラ・ボ埼玉」を設立し、そこでは、事務局長として、NPOとNPO、NPOと市民、NPOと行政、行政と市民、それぞれをつなげる活動をしました。その結果のひとつの事例として、保健所とＮＰＯが連携して作った「心の相談室＜コ・ラ・ボ＞」があります。新聞紙上にも大きく取り上げられました。

「生きているものには進化する力」がある

私は、組織も人も変化へのきっかけを与えたり、それぞれをつなげたりすることはできるが、それ以上のことはできないと思っています。無理に変えようとするから大きな間違いを生み出すことが多いのだと思います。

「本来、人間は誰でも必ず進化する力を持っている」と一回セッティングすれば、何もことさらにこうしなければ、あーしなければいけないということはないのです。私たち一人ひとりが、赤ちゃんであろうと、お年寄りであろうと、みんな進化する力を持っている。そして、その進化力をどう引き出せるかが、その場に関わった人の「技＜ワザ＞」なのです。

ひとつの事例ですが、私には91歳の母親がいます。頭は明晰（笑）ですが、歩くことができない。ヘルパーさんは色々と世話をしてくださっています。至れり尽くせり。私はケアマネージャーに「これはおかしいよ。母親の生きる力を奪っているように感じる。介護とは世話することではなく、被介護者の生きる力を引き出すことではないか。今のままではおむつ状態から脱却できない。顕在化していないけれど母親にはきっとおむつ状態かから脱却したいという生命力があるはず。母親にもう一度パンティをはかせるプロジェクトを作ってほしい」と訴えました。今、母親は毎日渾身の力を振り絞って、ポータブルトイレで用を足しています。91歳でも進化する力はあるのです。

ましてや、子どもたちや若者たちにはもっと強い進化する力があるはずです。しかし、社会はその力を奪っているのが現状です。

例えば、学校に行かなければいけない、夫婦はこうあるべきだ、親子はこうあるべきだ、と決めつけ、社会はロープでひと括りにして無理やり引きずります。しかし、それをやろうとすればするほど、裏目に出る場合が多いと思います。結果的にうまくいく場合もありますが、月日がたってそれまで抑えられていたことが、ドカンと爆発する場合もあるのです。それよりも、年齢に関係なく人それぞれが必ず持っている生きる力、生物として細胞レベルでの生きる力を信じた方が賢明ではないでしょうか。

では、子どもたちに生きる力を認識してもらうためにはどのような対応が必要なのでしょうか。

「今はプロセス、夢の途中」と考えるようにさせることだと私は思います。初めから「目標」とか「目的」とかをデカデカと掲げるのではなく、その場その場で「子ども自身も気が付かない、潜在化している生命力」に水を注ぐことが大事なのです。だから、ある子が不登校で苦しんでいるとすれば、その苦しみ、もがきはその子が生きる力、進化する力を生み出すためのプロセスなんだということを真正面から信じてあげることが大事なのです。さらに、私たち大人や社会にとって大事なことは、その子どもの変化のあらゆる場面を想像し、その子どもの変化に応じて、対応できる“引き出し”をたくさん用意することなのです。面倒見がいい、というだけではだめです。たくさんの“引き出し”を持つキャパが必要なのです。

組織を有機的につなげて共同体へ

親世代をはじめ、今誰もが考えている教育というのは「いい学校に入れるのか」ということに尽きます。例えば、100点満点で、10点しかとれなかった子が20点取れるようになったら、これはものすごいことです。しかし、100点満点の20点はたいしことはないと考える人がほとんどです。そういう発想でなく、その子が今持っている力を伸ばしたことを認めるような学校が必要なのです。例えば、100メートルを20秒で走っていた子が、練習によって19秒5で走れるようになったとします。その子はタイムを縮めるために相当の努力をしたと考えられます。タイムではなく、タイムを縮めるために要したプロセスを褒める大人が周りにいれば、子どもというのは素直に伸びると思います。子どもと接する場合、結果ではなく「プロセス」を大事にする「社会」が必要です。

これからのむさしの学園の方向は、私がいなくてもこれまでの組織が有機的につながるようにしようと思います。子育ての悩みを抱えた親たちの居場所として作った「親サロン」とむさしの学園の卒業生の息抜きの居場所として作った「若者サロン」の二つを統合して「ひと塾」を設立（11年）しました。また、埼玉県教委の指定を取り技能連携校の「むさしの高等学院」も設立しました。「子育てに悩む親の集い」も再生しました。

私が代表を務める、ＮＰＯ法人フリースクールむさしの学園、むさしの高等学院、ひと塾、まなび教育センターだけではなく、他のＮPOの仲間たちを含め、いろいろな機能を持つ組織が手助けし合う共同体のような存在になって、それぞれを必要とする子どもたちや親を受け入れられるものにしていき、次世代へ引き継ぎたいと思います。

（聞き手と構成　本誌）